

〈小学生の部 最優秀賞〉

思いやり大作戦

則武小学校 六年 和田 煌生

僕は、口が悪いです。それで、よく友達とけんかをします。本当はけんかなんてしたくないです。でも、ついつい友達に、きつい言葉をかけてしまいます。

僕は則武野球少年団のキャプテンを務めています。ある日の試合で、仲間がボールをこぼしてしまった時がありました。試合に夢中だった僕は、その子にひどい言葉をかけてしまいました。

「おい、いい加減にしろよ。なんでボールを落とすんだよ。集中しろよ。バカか。」

僕のこの言葉で、みんなが気まづくなりました。その子は泣いてしまいました。それから僕たちは、調子が悪くなり、

試合は負けてしまいました。家に帰ってから、僕は、お父さんとお母さんに叱られました。僕は悩みました。

「またやっちゃった。どうしてこんなにきつい言葉をかけてしまったんだろう。」

答えが知りたくて、毎日、考え続けました。教室に入る前は、特に考えこんでしまって、少し暗い気持ちになりました。

そんなある日、授業の前に先生から「思いやりの心」という言葉を聞きました。友達の気持ちをよく考えて行動するということです。僕は、はっとしました。僕には、思いやりの心が足らなかったんだ。遊んでいる時、野球をしている時、自分が楽しむことしか考えていなかったのです。この日から思いやりの心を身につけようと、作戦を立てることにしました。

試しに、この前の試合で泣かせてしまった仲間が守備でミスをした時、

「こうすると、ボールをこぼさずに取れるよ。」

と試してみました。するとその子は、

「わかった、ありがとう。」

と、言ってくれました。僕は、うまくいっただ、心の中ではしやぎました。次に、授業中、わからない問題があつてこまっている友達に、優しく教えてあげるようにしました。友達からの

の

「ありがとう。」

という一言を聞くと、何だか達成感もわいてきました。思い

やりの気持ちを持つことがどれだけ重要かを知りました。僕は、この思いやり大作戦を続けました。すると、みんながいつもよりも笑っていました。そして、僕に優しくなったよくな氣もしました。クラス全体のふんいきが変わってきたのです。僕は嬉しくなりました。嬉しくなると同時に、心のモヤモヤもすっきりしました。

友達とけんかをするのは、ずいぶん減ってきました。でも、これからも思いやりの心は持ち続けたいと思います。まだ時々、自分勝手な考えをしてしまうことがあるし、思いやりの心は簡単に身に付くものではないと思います。中学生になっても、高校生になっても、大人になっても、友達や周りの人と仲良く暮らしたい。だから、僕はいつでも、だれに対しても優しくできるように、人の気持ちを考え続けていきます。

自分が変わるだけでなく、みんなを変えることができる思いやりの心。世界中の人々が思いやりの気持ちを持つことができれば、もっと明るく優しい世の中になる。まだまだけんかをしてしまうこともあるけれど、もう、僕は悩みません。思いやりの心を持っていれば、みんなと楽しく生活できるから。

〈小学生の部 優秀賞〉

差別をなくす一歩

早田小学校 六年 樺山 葵

私が、障がいのある人の人権について考えたきっかけは、自分が目が悪くて、たくさん苦勞をしてきたからです。だから、障がいの中でも視覚障がいがある人の人権を例に考えました。

私は、目が悪く、眼鏡をかけても、あまり視力は変わらない弱視です。他にも、遠視や近視などのたくさん視覚障がいがあります。弱視の私は、遠くのもが見えないので、何があるのか、何て書いてあるのかなど毎日毎日、様々なことで不安をいただいています。例えば、学校のドッジボールは、最

かったので、とても苦勞したそうです。それに比べると、今は、とても、めぐまれているんだなと思います。私はよく、全盲の人などは、視覚障がい者と世の中でも言われ、全盲の人のテレビや映画もたまにやっているのを見かけます。しかし、

弱視の人なども、障がい者にとらえられるべきだと私は考えます。なぜなら、眼鏡をかけて生活している人はたくさんいるけれど、その中にもよく見えていない人は少なからずいます。見た目では判断しづらいし、自分が見えているから、見えているのは当たり前と考えている人がたくさんいると思うからです。この自分の当たり前は全ての人の当たり前ではないということを考えられる第一歩になるのではない

初から外野に入れてもらうけど、ボールが見えないので、

「どこからとんでくるんだろう。」と、とても怖くて、ドッジボールは、大きらいです。他にも、友達に呼ばれているけど、どこにいるか分からないなど、ふつうの人には、どうってことない事が私には不安でたまらないです。このような悩みは障がいがある人でも人それぞれ全くちがいで、たくさんあります。そして、それを分かってもええ、大変な思いをする人もたくさんいると思います。私の祖父は、目が全く見えない全盲です。祖父は幼いときから、今の私より目が悪く、年をとるごとに目が見えなくなっていたそうです。祖父が幼いときは、今私が使っているような単眼鏡や、拡大教科書もな

でしようか。そして、そう考えられることが、障がい者へだけじゃない、あらゆる差別を減らすことにも、つながるのではないでしようか。

私は、身近な存在や自分の経験から、障がいがある人たちは、重症の人、軽症の人、みんなつらく大変な思いをしているということをよく知ってほしいです。そして、その人に合った配りよを当たり前と考えられる世の中になってほしいです。そのことは、自分の当たり前は全ての人の当たり前ではないと考えられる第一歩になると思います。そして、その考えを全ての人がもつことで、差別が減っていくと考えました。

〈小学生の部 優秀賞〉

女の子だから 男の子だから

早田小学校 五年 窪田 光来

私は「女の子だから」「男の子だから」となんて言われるのが分かりません。今十一才ですが、今までに何回もそういう経験をしたことがあります。

ようち園年長の時に、生活発表会でピーターパン役をやることになりました。先生が衣しよを手作りしてくれましたが、四人の男の子と私の衣しよはすそが少しだけちがっていて、男の子のは、すそがギザギザで、かっこいい感じでした。私のはすそが丸くてふわふわしていました。私は、私のだけなんてちがうだろうと思いました。友だちに、「なんて私のだけふわふわな衣しよなのかな。」

と聞きました。友だちに、

「女の子だからかわいいほうがいいんじゃない。」

「かわいいよ。」

と言われて、うれしかったけど、ピーターパンは男の子の役だからかっこいい衣しよのが良かったなと心の中で思いました。発表会の後に弟に、

「お姉ちゃん、かっこよかったね。」

と言われてうれしかったです。

小学校の入学前のランドセルを選ぶ時に、青がいいと言ったら、お父さんに、

「女の子だからランドセルは赤かピンクか茶色にしてください」と言われて、別にいいじゃんと思いましたが嫌な気持ちになりました。ランドセルについては、お母さんから六年間ずっと使うもので、

途中で買い替えないものだから、あきずにつつと使えるもの

を選ぼうといわれ、こげ茶色にしました。今となっては、ラベ
ンダーや水色にしなくて良かったなと思っています。

小学生になつてからは、おばあちゃんに

「女の子だから座り方に気を付けなさい。」

「女の子だから、お手伝いしなさい。」

「女の子だから、言葉づかいに気を付けなさい。」

とよく言われるようになり、なんて?と思うことが多くなりました。男の子でも座り方に気を付けなきゃいけないし、お手伝いだって男の子でもする方が良くないし、言葉づかいが悪くない方が良いと思います。

「女の子だから」と言われる理由が分かりません。「女の子だから」という言葉だけが、いつも心に残っています。

金子みずすんの詩にあった

「みんなちがってみんないい」

がログゼの時がありました。人間はみんなそれぞれ好きなものや好きなことがちがうのは当たり前、好きなものを押しつけるのは、間ちがつているし、それいいねと言える心を持ち続けたいです。

おばあちゃんがいとこの男の子に

「男の子だからいい大学に行きなさい。」

と言っていたのを聞いて、女の子はいい大学行っちゃだめなの?と思いました。私は女の子だから、そう言われなくて良かったと思いました。やっぱり男、女関係なく、やりたいことをやり、好きなことをすれば良いと思います。

〈中学生の部 優秀賞〉

知らない誰かへの心配り

東長良中学校 三年 野崎 茜

私の祖母は、障がい者学級の担任の先生や、視覚障がいの方が通う盲学校の先生をした経験があります。その中で、の障がい者の方々のかわりを私や姉、母によく話してくれました。そんな祖母の話の中から二つの話を作文を通して紹介しようと思います。

ある日、祖母が「体の不自由な方々を外に連れていこう」というボランティア活動に参加しました。祖母は首から下が全く動かないAさんと共に行動していました。その日はとても暑い日でした。喉が渴いた祖母は、一緒にいたAさんに、

「私がお金を出すので何か飲みませんか。」

と聞きました。するとAさんは、

「飲まないようにしているので結構です。」

と答えました。祖母はなぜこんなに暑い中、飲み物を飲むことを制限しているのかわかりませんでした。Aさんに理由を聞いてみると、

「私はヘルパーさんに手伝ってもらわないとトイレができないから、飲

みませんし、火事の危険もありますから、利用する時だけ扉を開けるようにしているんです。」

多目的トイレでの喫煙。はたしてこの行動は、今回の生徒のような多目的トイレを利用する人々のことを考えていたのでしょうか。恐らく、こう考えていたと思います。多目的トイレだったら人目につかないし、誰の迷惑にもならないだろう、と。

私はこの二つの話を聞いて、誰かが困る状況を自分たちがつくりやすいようにしよう、と思いました。私たちにどうして、トイレは行きたいときに行けますし、喉が渴いたら水を飲めます。しかし、体が不自由な方々はそれが決して簡単なことではありません。トイレをするためには介助が必要で、水を飲むためにはヘルパーさんと会うタイミングまで考えなければいけません。誰にも迷惑をかけない、と黙っていても、この日本、世界には様々な立場、状況の人がいます。自分にとっては何気ない行動でも、誰かにとってはすごく困る行動かもしれません。だからこそ、自分の行動の一つ一つに意識を向け、知らない誰かへの心配りをするのが大切だと思います。「知らない誰かへの心配り」と聞くと、想像しにくいかもしれませんが、しかし、きっと私たちにできることは普段の生活の中でもあるはずですよ。

み物を飲む時間は決まっています、ヘルパーさんと会うときにトイレがで

きるようにしているんです。」と教えてくれました。それを聞き、祖母は、体の不自由な方は飲み物を飲むタイミングまで考える必要があることに驚きました。

私もこの話を聞いて、初めて、体が不自由な方々がヘルパーさんと会うタイミングを逆算して飲み物を飲む時間を決めていているということを知りました。

また、別のある日。祖母は障がい者学級の知的障がいがある生徒と出かけていました。すると、その子が駆ってトイレに行きたくなってしまいました。その子はトイレを我慢することができず、介助が必要だったので、祖母は大急ぎで多目的トイレに連れていきました。しかし、鍵は閉まっていた。扉には、「利用する方は駅員に声をかけてください。」と書かれた紙が貼られていました。祖母は戸惑いながらも、走って駅員さんに声をかけに行き、無事にトイレを済ませることができました。その後、祖母は駅員さんに、

「困ります。どうして鍵を閉めているのですか。」

と聞きました。すると駅員さんは言いました。

「よく多目的トイレでタバコを吸う女子高生がいるんですよ。苦情も

例えば、点字ブロック。みなさんも道で見かけたことがあると思います。点字ブロックの上に物を置いたり、自転車や歩行者が歩きたりすることがあります。目の不自由な方は点字ブロックを頼りに歩きます。「命綱」とも呼ばれています。その命綱が途切れてしまったら、その人はどうなってしまうのでしょうか。前に進めなくなってしまう。物を置く、ただそれだけの事でも場所を考えて置かないと、人が歩けなくなってしまうのです。多目的トイレ、点字ブロック、手すり、スロープ。これらは、「誰かが困る状況をつくらないために」作られたものたちです。公共の場にこれらがあるということは、誰かが使うということですが、使わないと生活ができない、という人もいるかもしれません。ところが、誰かが困る状況をつくらないために作られたものたちが、私たちの行動次第で、誰かが困ってしまう原因になるのです。

ちょっとした行動で、誰かがすごく困ってしまうこと。ちょっとした心配りが、誰かの大きな助けになること。それをみんなできたりあえば、社会は大きく変わっていくと思います。どんなに小さいなことでも構いません。その心配りが、きっと誰かを助けます。どんな人でも、どんな場所でも、みんなが過ごしやすい社会を目指して。

認知症

岐北中学校 二年 鹿野 望生

先日、私の祖父が認知症だと分かった。それまで、身近に認知症の方を目にする事がなく、テレビで見る程度の認識だったので、まさか家族がなるとは思わず、とても驚いた。

それまではぼんやりとしか認知症を知らなかったが、この事をきっかけに認知症について調べてみる事にした。認知症とは、病気や障害などの様々な原因で認知機能が低下してしまい、日常生活に支障がでる状態のことをいう。認知症の症状には、もの忘れや理解力の低下などたくさんあり、祖父にあてはまるものも少なくなかった。確かに思い返してみると、何度言っても分かってくれなかったり、一日に何十回と同じことを話したりしていた。でも、祖父は八十歳を超えていて、耳も遠いため、歳を取るともの忘れがひどくなるという老化現象だと考えていた。

もっと認知症について知っていれば、理解できていれば、見落とすことも出に残っている。祖父も久しぶりに遠出したと喜んでいて。でも私は、母が旅館に行く事を計画していた時に、祖母が、「障がい者と外に出て周りの人がどんな目で見てくるか分からないから、外出はさせたくない。」

と言っていたのが引っかかっていた。これを聞いた時は祖母の言うことに共感していた。せっかくの旅行が、祖父がいると楽しくないかもしれないと思っていた。結果的にとても楽しかったが、今改めて考えると、あの時の私の気持ちは、祖父の気持ちを一切考えようとせず、全く尊重していないと気づいた。

祖父は、テレビショッピングで見た物をすぐ買った、嫌いな野菜を私の皿に乗けたりして、周りに迷惑をかけたりすることも多かったが、祖父が認知症だと分かった時、驚きと同時に、気付くことが出来なかったことが腹立たしかった。私の言動や行動がどれだけ祖父を傷付け、悲しませていたのか。なりたくでなかった訳でもないのに周りから冷たくされる事がどれだけ辛いことなのか。祖父に寄り添うどころか、

となく祖父のサインに気づけていたかもしれない。行動を起こさなかった事を後悔し、祖父に申し訳なく思った。

さらに調べていると、

「認知症の方との接し方」

という記事を見つけた。それには、周りの人が病気だということを理解して、本人の気持ちに寄り添うことが大切で、心がけていくべきことだとあった。

私は今まで、まともに会話すらできない祖父にイライラする事が多くて、祖父の気持ちを少しでも尊重し、理解しようとは思っていなかった。元々、耳や足腰など不自由な祖父は病院にも毎日のように通っていて、その送り迎えや世話は祖母がしていた。会いに行く度、いそがしそうにしている、疲れて辛そうな祖母を見ていると、祖父が少し嫌いになっていた。どうせ話しても何も伝わらないと思い、祖父とも話さず、避けるようにしていた。

私が小学三年生の時、体調が少しだけ回復した祖父と家族みんなで、温泉旅館に泊まった。その地域でしか食べられない豪華なお料理、祖父は現在入院している。たまに帰ってくるが、見ない間に祖父の体は別人のように変わっていた。筋肉が落ちて痩せ細り、体重も二十キロ以上軽くなっていた。それでも、食事はとれて、口も動くらしく、やっぱり病院食は味がうすくてまずいなど、たくさん話をしてくれた。前みたいになんか話せないと話をせず、勝手にいら立つような最低なことはせずに、祖父との会話を楽しむようにしている。今までしてきた全てをこれで無しにしようとは思わないが、祖父が私と話して笑ってくれると、祖父に寄り添えている気がしてうれしい。

認知症を通して、改めて家族として何をしておくべきか考えられた。認知症になった祖父を障がい者として接するのではなく、家族の一員である大切な「おじいちゃん」として少しでも祖父が楽しく過ごせるように、進んで行動していきたい。

たくさんの人に、認知症という病気を知ってもらい、認知症の方を尊重し合える関係が広がってほしいと思う。